

自然と調和した住環境に集まる移住者の支持 新市誕生11年目に始まる新たなステップ！

物部川を絆に誕生した森林都市

県都・高知市中心部から香美市の中心市街地（土佐山田地区）までは車で約30分（15km圏）。高知県北東部に位置し、市内を貫く清流・物部川沿いに長く延びた広大な市域（約538km²）の端まででも、高知市中心部から90分以内（40km圏）で到達できる。JR土讃線の利用なら高知駅から土佐山田駅までは各停で26分だ。

全国の主要都市と結ばれる高知龍馬空港へも車で約15分。隣接する南国市（南国IC）から高知自動車道を活用すれば、大阪・神戸・名古屋・東京とも直結する。

このように交通至便な立地条件にある香美市だが、その市域のほとんどが見事な山林で覆われている。

市域全体の約88%が山林（半分以上が民有の人工林）に占められた香美市は、全国有数の

の森林王国・高知県においても、抜きん出た存在の森林地帯といえる。同時に民有人工林の多いことが物語るように、地域を貫流する物部川を活用した林業が、300年以上も前の旧幕藩時代（土佐藩）から、盛んに行われてきた地域だった。

平成18年3月1日、旧香美郡土佐山田町・同香北町・同物部村で構成される香北地域2町1村の合併により、新市として誕生した香美市のエリアは、土佐藩以来の《輪伐法》^{りんぱつぽう}の実践とそれに伴う《留山・留木制度》^{りゅうさん・りゅうもくせいど}などを通じて、森林や木材の計画生産等の面ですつと協力し合ってきた。

（※注Ⅱスギやヒノキなどの人工林の伐採と育成を、計画的に推進・循環させるための手法と制度）

そして物部川上流域の旧物部村や香北町で伐り出された木材、あるいは生産された木炭などを物部川の水運で運び、中流域の旧土佐山田町でそれを取りまとめ、街道沿いに流通させていくという関係を歴史的に構築してきたのだ。

ほうこういんしょういち
法光院晶一
香美市長

たのだ。さらに流量が多い上に急で、利水のしにくかった物部川の水を取水する山田堰^{やまで}（土佐藩初期の家老・野中兼山が築造。遺構は現在、県指定文化財）の築造以後は、新田開発も盛んに行われるようになった。物部川はこのように、時には洪水被害を生む暴れ川の様相をあらわにしながらも、香美市エリアの経済的・文化的命脈を常に握る、重大な役割を果たしてきた。

「香美市を形成する3つの地区は、昔も今も、まさにいろいろな意味で、物部川とい





緑被率も緑視率も満点のみずみずしい市域

う絆^{きずな}で深くつながり合い、何かと互いに補完をし合ってきた地域なのだと思います」

そう語る法光院晶一・香美市長は、物部川上流域・物部村の出身である。合併前の前職は物部村職員で、合併後は香美市総務課長などを歴任。約30年間にわたり、さまざまな行政現場を体験し、物部川を通じて、香美市エリアの隅々までを熟知している。



伐り出された木材のストックヤードが森林王国の証(土佐山田地区)

それにしても法光院という姓は非常に珍しい。物部地区には平安時代末期から続く民間信仰「いざなぎ流御祈禱^{ごきとう}」(国指定重要無形民俗文化財)が伝えられており、信仰を司る立場の人々は「太夫」と尊称されてきた。「ひよつとしてその太夫の關係のご家系ですか?」。

思わず聞くと、法光院市長は「お寺の住職ですかもいわれますが、まったく違います(笑)。父親は物部川上流域の水力発電所で働く技師でした。だから私の子どものころの遊び場は、物部川上流と周辺の森林地帯でした。この付近に今も多い、鹿や猿たちと共に育ったようなものです」と笑う。

前述のように香美市の森は深い。特に上流



国指定重要無形文化財の「いざなぎ流神楽」(物部地区)

域の物部地区は森林面積が地域の90%以上にも及び、ほぼ全域が中山間地帯といえる。香北地区もそれに準じた環境であり、人口分布からいっても都市的集積は土佐山田地区が中心になっている。

「香美市の現在の人口は約2万6600人ですが、そのうち2万人強が土佐山田地区に集中し、香北地区が4500人強、物部地区が約1900人です。合併した時点の総人口が約3万人でしたから、10年間で1割ほどが減ったということになります」(法光院市長)

法光院市長が子どもの昭和30年代前半には「物部村には1万2000人以上の人口があった」という。香美市の統計資料を見



夏の風物詩「奥物部湖湖水祭」(物部地区)

ると、実際、香美市エリアの人口は昭和25年に5万人強、昭和30年には4万7000人弱とある。

移住希望者に 働き盛り世代が目立つ理由

しかし、林業の衰退などの産業構造の変化や、都市化の遅れ、新たな雇用の場の希求などさまざまな要因によって、「物部村の住人は香北町へ、香北町の住人は土佐山田町へ、土佐山田町の住人は高知市方面へと移住する傾向などが顕著になり、総人口は急速に減少」(法光院市長)していく。そうした社会減少による人口減少の時代から、少子高齢化が進む近年は、自然減による減少、すなわち出生者数を死亡者数が上回る現象がずっと続いている。

転入・転出者においても、21世紀に入って

からは転出者が転入者を上回り続けてきたが、近年はその傾向に変化が見える。移住者を中心に転入者が増え、転出者との差はわずかになりつつあるのだ。

「その背景には、香美市の自然環境の豊かさをポジティブにとらえ、終の棲家にしたいたいと考えるような方が増えてきているということがまず一つあります。それに加えて、特に東日本大震災以降は、南海トラフなどによる各地での巨大津波の予測などもあり、香美市は高知県内の市の中で唯一、津波被害の心配がない地域という安心感を指摘する声もあるようです」(法光院市長)

香美市の安全安心かつ自然環境の豊かな地域性は、移住者の声の調査記録などを見ると、確かに圧倒的な好感度を得ていることが分かる。香美市への移住者には、定年世代以上に働き盛り世代、子育て世代が目立つのも特徴的だ。ゆず(高知県下出荷量第1位)やニラ、やつこねぎなどの特産物を産出する環境に惹かれ、移住する就農希望者。さらには、豊富な森林資源を活用したクラフトワークを目指す人など、香美市の環境面を評価し、移住してくる人々の数は安定的に増えているのだ。

例えば物部地区の大西集落は、数年前まで世帯数が10軒前後に落ち込み、高齢化率が50%をはるかに超えるなど、限界集落化が急速に進んでいた。しかし今では移住者の増加で働き盛り世代とその家族が半分以上とな



香美市エリアの母なる大河・物部川(土佐山田地区)

り、高齢化率は一気に30%を下回ったという。10数軒の集落とはいえ、この事実の持つインパクトは非常に大きい。

市政ルポではこれまで各都市を訪問し、移住・定住問題の取材も実施してきたが、純粋に移住者増加の理由だけで、集落の世代(年齢)構造そのものが変わったというような事例は、ごく少ないのが現実だ。

「就農希望者や林業を本気で志望する方々には、各種の支援や補助を行っています。香美市のような環境を持つ地域は、自然が豊かといえる半面、それなりの厳しい環境に囲まれているのだともいえます。だから単に自然が美しいから来てくださいというような、安易な移住定住の呼び掛けはしないようにしています。例えば農業や林業などの志望者も

香美市

市 政 ル ポ

(高知県)



土佐の端午の節句に不可欠のフラフ(ハチロー染工場会長・三谷仁志氏)



出荷量県下一の名産・柚子玉



中山間地の多い香美市では小型路線バス(写真)のほか交通弱者向けの小型デマンドバス(予約制)も稼働

《本気》で来てくださる方でなければ、来ていただくかなくとも結構とさえ思っています。この厳しい自然環境を理解し、本気でここに暮らしたいと思ってくくださる方には、逆にこれほど自然環境の素晴らしいところは無いといふことが、実際に暮らせば如実に分かっているただけるものと考えています」(法光院市長)

前出の大西集落の事例は、香美市の自然環境や住環境、人口減少化に悩みつつも移住者に対し《本気》を求める姿勢などを含め、あらゆる角度から検討した上でこれを「是」とし、本気で移住した人たちのもたらした一条の希望の光、といえるのではなからうか。

移住者への支援と「よってたかつて教育」

なお、本気で移住・定住を考えている人々には大要、次のような各種の支援制度が用意されている。

【就業支援】◆新規就農研修支援事業(研修受け入れ農家での研修費、月額15万円以内補助)／◆香美市青年就農給付金(45歳未満の新規就農者で所得が250万円以下の人に年間150万円以内補助他)

／◆香美市商工会空き店舗で等利活用助成金(空き店舗での出店希望者には内装費、家

賃、備品購入費等に限度額50万円の補助他)

【住宅支援】◆香美市木材住宅支援事業(香美市産木材の使用で市内に住宅建築する人に限度額200万円補助、県補助費(限度額100万円)に上乗せ)／◆香美市空き家改修等補助金(空き家バンク登録物件の改修費や荷物の処分費などに限度額50万円補助)／◆お試し移住体験住宅(県外在住者で香美市移住を希望する人に家賃1万5000円で1カ月入居の補助、1年間まで延長可)

【子育て支援】◆香美市私立幼稚園就園奨励費補助金(私立幼稚園在園の3～5歳児保育料減免)／◆多子世帯保育料軽減事業(18歳未満児童3人以上の世帯で第3子以降3歳未満児の保育料免除、幼稚園保育料減免)／◆医療費助成制度(中学3年生までの医療費免除)／



日本三大鍾乳洞の一つ龍河洞の景観は庄巻(土佐山田地区)

◆香美市高等学校等奨学金(高校生・大学生向け奨学金制度、高校生月額1万円、短大・大学生同1万3000円)

そのほか、香美市では市内小中学校の校舎耐震化率100%や市内すべての幼・保・小中学校における給食完備などの教育環境もアピールポイントとしているが、こうした教育面の取り組みにおいて、今回の取材でひととき興味を引かれたのが、「よってたかって地域が育てる教育」と題する、香美市のキャリア教育への試みだ。その概要について、教育委員会・上村安和主監は次のように語った。

「香美市は平成25年度から27年度までの3年間、高知県から《キャリア教育推進地域事業》の指定を受け、市内の全小中学校でキャリア教育推進の研究を行いました。これは人・自然・伝統・産業・保育所から大学までの今あるすべての環境を活用して、何事にもかかわる力や、観察する(みつめる)力、最後までやりぬく力、夢をかなえる力を醸成しよ

うとする取り組みです」

地域に暮らす人々、その人たちが携わる多彩な仕事や経験、さまざまな地場産業、自然環境などをすべて「地域の資源・教材」ととらえ、積極的かつ意図的に「よってたかって」地域全体で子どもたちとかわり合うことで、互いに学び合い、教え合う双方向の関係を構築していく。これらの活動を、各教科、特別活動、総合的な学習の時間などに事あるごとに関連付けし、多彩な刺激を受ける中で、子どもたちが「人間関係の形成・社会形成能力(かかわる力)」「自己理解・自己管理能力(みつめる力)」「課題対応能力(やりぬく力)」「キャリアプランニング能力(かなえる力)」を醸成する《よすが》にしようとの試みだ。

上村主監はこの事業の3年間の実施の結果、ほかの3つの力に比べて、「やりぬく力」において、まだ伸びる余地があるような気がする」と語る。香美市では現在、そうした成果を踏まえ、市内全小中学校の本格的な「コミュニティスクール化」を、3年間の実施で子どもたちにも地域の人たちにも受け入れられつつある、地域を挙げての「よってたかって」体制を維持しつつ、推進したいとも強調した。

このように地域が本当の意味で一体になって行うコミュニティスクールの体制は、大都市圏ではなかなか難しい。香美市のように人口規模が小さく、市民の地域への愛着度が高く、多彩な自然環境・文化環境の備わった地



JR土佐山田駅前の観光案内所

域ならではのものだろう。

そしてこうした手づくりに近い、地域ぐるみの教育支援体制こそは、豊かな自然・文化環境を求めて香美市への移住を希望する子育て世代の人たちにとって、何よりも理想の教育環境を形成する母体になるのではなかろうか。

人口減少化時代に 自然体で進めるまちづくり

香美市への移住・定住志望者を引き付ける《要因》は、当然、交流人口の増大にも大きな原動力となるはずだ。日本一と自他共に認めるアユ、アメゴなども豊富に獲れる物部川はもちろん、日本三大鍾乳洞とされる龍河洞(国指定文化財)、紅葉の名所べふ峡とべふ峡



鳥獣害対策として急がれる狩猟免許取得者の養成風景と防護柵

人気商品として販売されていた。また市内の土産物を扱う店では、シカをはじめとする有害鳥獣の被害に悩む香美市ならではの、シカ肉ソーセージ、みそ漬けなどが売られているほか、シカなどのジビエ料理を扱うレストランなどもある。

狩猟免許保持者の高齢化が進む中、免許保持者養成の事業を懸命に実施するなど、香美市では林

温泉、山中にひそむ大瀑布・轟の滝、かつて塩を運ぶために使われた土佐塩の道などなど。さらに坂本龍馬の愛刀「吉行」を生んだとされる刀鍛冶から野鍛冶へ転向し、その名を国際的にもとどろかす「土佐打刃物」、鯉のぼりとともに土佐における端午の節句に欠かせない伝統工芸品「フラフ」(フラッグが語源ともいわれる)など、歴史と独自の個性を放つる伝統工芸の数々も、移住者、観光客を問わず引き付ける魅力とオリジナリティにあふれている。また旧香北町出身の漫画家・やなせたかし氏のエッセンスが詰まった「やなせたかし記念館」へは、アンパンマンややなせたかし作品のファンが全国からやって来る。

「そうしたほかにはない地域資源の維持・保全とともに、今後、香美市がさらに推進しな

ければならないことを挙げれば、協働のまちづくり、恵まれた環境を生かした自然共生都市の構築、独自の個性を持つ地場産業の振興、今あるもののブラッシュアップを基本に推進する交流人口の増加およびにぎわいづくりなど、多岐にわたります。今年度から実施している『第2次香美市振興計画』においても、その旨を詳細にうたっていますが、働き盛りの移住者の方たちが少しずつ増えて、転出超過傾向が是正されつつあるなど、今ある私たちのまちの魅力や、まちづくりの方向性は、徐々にではありますが内外に浸透し始めているのかな、とも思っています(法光院市長)

土佐山田駅構内のコンビニでは、山田高校の生徒たちが開発した、特産のシヨウガを使った「高校三年生の山田まん」という饅頭(まんじゅう)が

業の衰退に伴い発生する鳥獣害が深刻の度を増すばかりだ。しかしそれを逆手にとり、新たな名物の素材に替えていこうとする姿勢は、江戸時代からの歴史を誇る森林王国ならではの取り組み。シカを巡るこうした香美市の事例は、まさに法光院市長の言葉にもあるように、自然の豊かさ(恵み)と厳しさ(害)が表裏一体のものであるということの「生きた証」といえる。そしてそんな自然と共生する暮らしを目指し、香美市に移住する人々の数も前述のように、少しずつだが着実に増えている。

日本全体の課題である「今や止めようのない人口減少」を背景に、香美市が「自然体」で進める各種まちづくりの、今後の推移が注目される。

(取材：文＝遠藤隆／取材日平成29年5月25日)



土佐打刃物は林業や農業に不可欠の逸品(土佐打刃物流通センター)